

**Working Paper No. 342**

規範意識・性格傾向と出生意欲  
—死生観・自己効力感・伝統指向・満足遅延耐性  
に注目して

中村 真由美

2021年10月10日



SCHOOL OF ECONOMICS  
UNIVERSITY OF TOYAMA

## 規範意識・性格傾向と出生意欲—死生観・自己効力感・伝統指向・満足遅延耐性に注目して

本稿では、死生観・伝統意識・性格傾向（非認知能力）と出生意欲との関連について検証する。まず第一節において「死生観と伝統意識と出生意欲」の関連について検証し、第二節において「非認知能力と出生意欲」との関係について明らかにする。

### I. 死生観と伝統意識と出生意欲

#### 1. なぜ死生観と伝統意識が問題なのか？

死生観と出生意欲との関連は表立って検証されてこなかった。既存の死生観についての研究を見ると、たとえば自殺や抑うつと死生観の関連について研究した研究（伊藤 2021 など）や、医療関係者が医療や看護を行う上での死生観との関連についての研究（間宮 2021 など）、日本人論や国際比較からの視点の研究（友井 2021）、宗教と死生観についての研究（丁 2020 など）、文学・芸術的と死生観の研究（林 2020 など）などに大きく分けることができる。しかし、国内外の文献を見ても、死生観と出生意欲との関連を直接検証した研究はほとんどない。

死生観と出生意欲との関連にもっとも近い研究としては、死生観と人口妊娠中絶に対する意識に関する研究がある。たとえば松浦（2000）は大学生を対象に、死生観と人口妊娠中絶との関連を検証している。ただし、死生観と出生意欲（子どもを何人予定しているか）との関連を直接検証したものではなかった。

このように死生観と出生意欲の直接的な関係についてはあまり注目されてこなかったが、両者は関わっていると考えられる。なぜかといえば、どちらも「人の生き死に」に関連しており、その「生き死に」についての自己決定（コントロール可能な範囲）と関わっているからである。人の出生や死を、人間自身の意思でどの程度決めてよいと考えるのか。一方の極には、人の生死は神の領域であり、人間が関わるべきではない（特に命を絶つ方向では関わるべきではない）という考え方がある。もう一方の極には、自分の生き方を自分で決めてよいのと同じように、死についても自分で決めてよいのだという考え方がある。生に対してもコントロールしてよいのであれば、すべて自然に任せるのではなく、積極的な産児制限を行っていこうと考えるようになり出生意欲（予定する子ども数）も減る可能性がある。

また、人間の「生き死に」についての考え方は、伝統や慣習に関する態度ともつながっている。伝統や慣習を重視する人は、伝統的にマジョリティが選んできた道筋を選ぶことが「望ましい」とされる行動をとることを重視すると考えられる。たとえば、かつての日本は皆婚社会と呼ばれるほど婚姻率が高かったので、結婚はした方がよいと考え、さらにできれば「結婚適齢期」と呼ばれる年齢に結婚することが望ましいと考えるだろう。過去 40 年の日本の既婚カップルの出生数は 2 人程度だったので（国立社会保障・人口問題研究所 2015）、子供もいたほうがよいと考え、できれば 2 人（か 3 人程度）くらいを持つことが望ましい

と考える。一方で、伝統や慣習を重視しない人は、結婚はしてもしなくてもよいと考え、子供も必ずしもいたほうがよいとは考えないかもしれない。少なくとも慣習的に望ましいから必ずその選択をしなければならないという縛りは弱くなる。つまり、伝統意識を持つかどうかは出生意欲（何人子どもを持つかという予定）に影響しうると考えられる。

このように、死生観や伝統意識は出生意欲と関わっている可能性がある。そこで本稿では、死生観と出生意欲、伝統や慣習の重視度と出生意欲との関係について検証していく。

## 2. データと変数

2018年3月に実施したオリジナルインターネット調査「出産意識調査」を分析対象データとして用いる。対象は25～35歳の、子どもが0人または1人である既婚女性を対象としている。調査実施は電通マクロミルインサイトである。

また、当該データの特徴として、「出生意欲」を示す変数として「理想の子ども数」と「現実的な（現実的な制約を考えた上での）希望する子ども数（つまり、予定子ども数）」の2種類について聞いている。本稿ではこの2つの出生意欲のうち、後者（現実的な制約も考えた上での希望する子ども数、つまり予定する子ども数）を従属変数として用いる。

独立変数としては以下のものを用いた。第一節の死生観や伝統意識の分析では、安楽死・自殺・妊娠中絶・死生観に対する態度<sup>1</sup>、伝統意識について聞いた設問に対する項目を用いた。第二節の非認知能力と出生意欲の分析では、独立変数として自己効力感と満足遅延耐性について聞いた項目<sup>2</sup>を用いた。

---

<sup>1</sup> 「不治の病の場合、安楽死を認められるべき」「どうしようもない困難に陥った人は自殺をしてもやむを得ない」「どんな理由であれ、女性が望めば、妊娠中絶が認められるべきだ」「人が自分の生き方を選択して良いのと同じように、自分の死に方についても選択して良い」に対して賛成～反対まで5値で答えてもらったものを用いた。さらに、伝統意識については、「以下の2つの意見に対して、あなたのお考えは、(A) (B)どちらの考えに、どの程度あてはまりますか。もっとも近いものをひとつだけお知らせください。

【A】伝統や慣習は大切に守っていくべきである 【B】現代にあわない伝統や慣習は見直すべきである」という質問に対して7値の選択肢（とてもA、A、ややA、どちらともいえない、ややB、B、とてもB）の中から1つを選んでもらったものを用いた。

<sup>2</sup> 自己効力感については、「(A)「人生は自分の思い通りに動かすことができる」という人もいれば、(B)「どんなにやってみても自分の人生が変えられない」という人もいます。あなたのお考えは、(A) (B)どちらの考えに、どの程度あてはまりますか。もっとも近いものをひとつだけお知らせください。【【A】人生は自分の思い通りに動かすことができる 【B】どんなにやってみても自分の人生が変えられない】）という設問に対して7値の選択肢（とてもA、A、ややA、どちらともいえない、ややB、B、とてもB）から1つを選んでもらったものを用いた。満足遅延耐性については、「お金の考え方について続けてうかがいます。お金を必ずもらえるとの前提で、(A) 今10万円をもらう、(B) 1年後に11万円をもらう、という2つの選択があったとしたらあなたのお考えは、(A) (B)どちらの考えに、どの程度あてはまりますか。もっとも近いものをひとつだけお知らせください。【【A】今10万円をもらう 【B】1年後に11万円をもらう】）という設問に対して同じく7値の選択肢で聞いたもの。

手法は、まず基礎的な分析として 2 変数の関係をみるため、クロス表分析と独立性の検定、および、残差分析を行う。

なお、残差分析の見方であるが、調整済み残差という項目はそのセルに偏りがあるかどうかを示している。1.96 よりも値が大きければ、そのセルには偶然の結果とは見なせないほど回答が集まっているということを示す。また、-1.96 よりも小さければ、そのセルには回答者が少ないということを示している。

### 3. 死生観が非伝統的な人は出生意欲が低い

死生観が「非」伝統的な人は出生意欲が低い傾向があった。ここでは死生観が伝統的な人々というのは天寿をまっとうする死のみを受け入れる立場であり、「非」伝統的な人達というのは人間の意志による死、つまり天寿をまっとうしない死に方を肯定する人達だと定義している。後者は命の終わりについて、天に任せるのではなく人間が決定してよいという考え方である。具体的には安楽死、自殺、妊娠中絶、死に方への選択を肯定する人たちである。

#### (1) 安楽死

戦後の日本社会では子どもは 2 人（または 3 人）という選択が長い間、最も一般的な選択であるとみなされてきた。たとえば国立社会保障・人口問題研究所（2015）によれば過去 40 年の夫婦の平均予定子ども数はその間ずっと 2 人（より少し多い）である。つまり、2 人（または 3 人）が結婚したカップルの大多数が選ぶ選択であるといえる。

そのような社会では、子供をあえて持たないという選択や、一人っ子という選択は一般的ではなく、家族や社会から批判的な目で見られるケースも少なくなかった（たとえば、「一人っ子は可哀想」などと言われたり、結婚したカップルに対し「子どもはまだか」と言われたり）。つまり、子どもを持たないという選択や、第二子を持たないという選択は戦後の慣習に沿った選択ではなかったといえる。

一方で、安楽死も慣習に沿った選択ではない。オランダのような国とは違い、日本社会では一般的には安楽死はなかなか受け入れられない状況にある。終末期においても、通常は延命が選択される。延命しないという選択は限られた状況に限定され、さらにしかるべき手続きを踏んだ上でしか選ぶことができない。2020 年に起きた ALS 囑託殺人事件のように、たとえ本人の依頼があったとしても、ほう助したものは殺人罪とみなされる状況にある（朝日新聞 2021）。社会的には受け入れられていない。

つまり、どちらも生死、特に死に対しては「天の意志が決めるもの」と「人間が決めるもの」という 2 極が存在するとしたら、前者が慣習的に広く受け入れられてきたといえる。

このことから、特に「死」に対して慣習的な態度を持つ人は（安楽死に賛成はしない）、予定子ども数についても慣習的な選択（2 名または 3 名）をするのではないかと予想した。

表 1 : 安楽死に対する態度と予定する子ども数

		予定する子ども数				合計
		0人	1人	2人	3人以上	
賛成	度数	110	263	350	29	752
		14.6%	35.0%	46.5%	3.9%	100.0%
	調整済み残差	5.3	1.9	-4.3	-1.5	
やや賛成	度数	57	255	464	36	812
		7.0%	31.4%	57.1%	4.4%	100.0%
	調整済み残差	-3.7	-0.8	3.3	-0.6	
どちらと	度数	34	131	240	31	436
もいえない		7.8%	30.0%	55.0%	7.1%	100.0%
い~反対	調整済み残差	-1.8	-1.2	1.1	2.6	
合計	度数	201	649	1054	96	2000
		10.1%	32.5%	52.7%	4.8%	100.0%

$$\chi^2(6)=43.201, p<.001$$

表 1 が安楽死に対する態度と予定する子ども数について分析したクロス表分析と独立性の検定の結果である（残差分析を含む）。使用した質問項目としては、「不治の病の場合、安楽死を認められるべき」に対して賛成～反対まで 5 値で答えてもらったものを用いた。

結果としては、「不治の病の場合、安楽死を認められるべき」という意見に対する態度は予定する子ども数と有意に関連していた。安楽死「賛成」の人は予定する子ども数は 0 人を、「やや賛成」の人は 2 人を、「どちらともいえない～反対」の人は「3人以上」を選びやすいという傾向があった。安楽死に賛成する人（つまり慣習に従わない選択をする人）は、予定する子ども数でも慣習とは外れた選択をする（0 人を選ぶ）傾向が現れていた。

予想した通り、安楽死について非慣習的な態度の人は予定子ども数が少なく、慣習的な態度の人は予定子ども数が多いという結果になった。

## (2) 自殺

「安楽死」と同じように、死を自ら選択する場面としては自殺がある。ここでは自殺に対する態度と予定する子ども数との関連を検証する。日本の過去においては、名誉の切腹というように自殺が社会的に許容される場面もあった。しかし現代日本において自殺は一般的に許容されない選択肢となっている。つまり、慣習的に見れば、受け入れられない選択肢といえる。自殺教唆が自殺教唆罪として処罰され、自殺法を示した『完全自殺マニュアル』がメディアからの批判にさらされるなど（「有害」規制監視隊 2014）、自殺は選択することが望ましくない選択肢として広く認知されている。つまり自殺を選ぶということは、（死に対

する) 慣習に反した選択肢と言える。そのため、死に対する慣習に反した選択肢を選ぶ人は、予定する子ども数についても慣習に反した人数を選ぶ (つまり 0 人など) と予想した。

表 2 は自殺に対する態度と予定する子ども数との関係を示す結果である。使用した質問項目としては「どうしようもない困難に陥った人は自殺をしてもやむを得ない」に対して賛成～反対まで 5 値で答えてもらったものを 3 値にリコードしたものをを用いた (「どちらともいえない」「やや反対」「反対」を合併した)。

自殺に対する態度と予定する子ども数との間にはやはり関連がみられた。「どうしようもない困難に陥った人は自殺をしてもやむを得ない」という意見に賛成する人は現実的な子ども数について 0 人を選ぶ人が多く、2 人や 3 人を選ぶ人は少ない。一方で、「どちらともいえない～反対」を選んだ人は、現実的な子ども数は 2～3 人を選ぶ割合が多く、0～1 人を選ぶ割合が少なくなっていた。

ここでもやはり、死を自ら決定することを肯定する考えを持つ者は出生意欲が低いという傾向が観察された。

表 2 : 自殺に対する態度と予定する子ども数

		予定する子ども数				合計
		0 人	1 人	2 人	3 人以上	
賛成	度数	41	59	86	2	188
		21.8%	31.4%	45.7%	1.1%	100.0%
	調整済み残差	5.6	-0.3	-2.0	-2.5	
やや賛成	度数	43	143	142	9	337
		12.8%	42.4%	42.1%	2.7%	100.0%
	調整済み残差	1.8	4.3	-4.3	-2.0	
どちらともいえない～反対	度数	117	447	826	85	1475
		7.9%	30.3%	56.0%	5.8%	100.0%
	調整済み残差	-5.3	-3.4	5.0	3.4	
合計	度数	201	649	1054	96	2000
		10.1%	32.5%	52.7%	4.8%	100.0%

$$\chi_{(6)}^2 = 70.824, p < .001$$

### (3) 妊娠中絶

「安楽死」や「自殺」同様に、死を人間が自ら選ぶという場面として (人工) 妊娠中絶がある。ただ前者 2 つと違うのは、死を選ぶ対象は自らの死ではなく、胎児の死についてである。また、人工妊娠中絶は産児制限の最終手段でもあることから、妊娠中絶への意識は直接子ども数のコントロールと関わっている。

表3は、この妊娠中絶に対する態度と予定する子ども数との関連を検証した結果である。使用した項目としては、項目としては「どんな理由であれ、女性が望めば、妊娠中絶が認められるべきだ」という意見に対して賛成～反対まで5値で答えてもらったものを3値にリコードしたものをを用いた（「どちらともいえない」「やや反対」「反対」を合併した）。

分析した結果、妊娠中絶に対する態度と出生意欲の間にも関連があった。「どんな理由であれ、女性が望めば、妊娠中絶が認められるべきだ」という意見に賛成する人は予定する子ども数0人を選ぶ割合が高く、2人を選ぶ割合が低くなっていた。一方で、「どちらともいえない～反対」を選んだ人は、0人を選ぶ割合が低く、2人や3人を選ぶ割合が高い。

つまり、（自らの死だけでなく）胎児の死に関しても選択可能であると考えてる人は少ない子ども数を選ぶ傾向にあった。一方で、選択に躊躇する、または選択すべきではないと考える人は慣習に沿った子ども数（2名と3名）を選びやすい傾向があった。

表3：妊娠中絶に対する態度と予定する子ども数

		予定する子ども数				合計
		0人	1人	2人	3人以上	
賛成	度数	66	113	136	12	327
		20.2%	34.6%	41.6%	3.7%	100.0%
	調整済み残差	6.7	0.9	-4.4	-1.0	
やや賛成	度数	49	188	291	20	548
		8.9%	34.3%	53.1%	3.6%	100.0%
	調整済み残差	-1.0	1.1	0.2	-1.5	
どちらともいえない～反対	度数	86	348	627	64	1125
		7.6%	30.9%	55.7%	5.7%	100.0%
	調整済み残差	-4.1	-1.6	3.1	2.1	
合計	度数	201	649	1054	96	2000
		10.1%	32.5%	52.7%	4.8%	100.0%

$$\chi^2_{(6)}=62.689, p<.001$$

#### (4) 死生観

ここまでは、「安楽死」「自殺」「妊娠中絶」という、個別の場面についての態度と出生意欲（予定する子どもの数）との関連を見てきた。死を選択することを「是」とする人達は予定する子ども数が少ない傾向にあり、死を選択することを否定する（または躊躇する）側にある人達は予定する子ども数が比較的多いことが明らかとなった。

このように死を選択してもよい（または悪い）という考えは、出生意欲と関わっているこ

とが明らかになった。そこで今度は、安楽死・自殺・中絶というような個別の場面ではなく一般的な死生観についてダイレクトに聞いた項目と出生意欲との関連を検証してみる。

表4は「人が自分の生き方を選択して良いのと同じように、自分の死に方についても選択して良い」という意見に対する態度と予定する子ども数との関連を検証したものである。使用した項目としては、「人が自分の生き方を選択して良いのと同じように、自分の死に方についても選択して良い」に対して賛成～反対まで5値で答えてもらったものを3値にリコードして用いた（「どちらともいえない」「やや反対」「反対」を合併した）。

分析した結果、一般的な死生観と出生意欲の間にも関連があった。賛成する人は予定する子ども数は0人や1人を選ぶ割合が高く、2人を選ぶ割合が低い。「どちらともいえない～反対」を選んだ人は0人や1人を選ぶ割合が低く、2人や3人以上を選ぶ割合が高くなっていた。

つまり、人間が生死をコントロールしてもよいという考えを持つ人は出生意欲が低く、人間が生死をコントロールすべきではない（またはその考えに躊躇する）人は出生意欲が高いことがわかる。

まとめると前節で見たように「安楽死」や「中絶」などの（生死にかかわる）個別の事象に対する意見だけではなく、生死に関する一般的な意見（生死に関して人間がコントロールすることが許されると考えるかというどうか）も出生意欲と関わっていた。

表4：死生観と予定する子ども数

		予定する子ども数				合計
		0人	1人	2人	3人以上	
賛成	度数	84	188	217	20	509
		16.5%	36.9%	42.6%	3.9%	100.0%
	調整済み残差	5.6	2.5	-5.3	-1.1	
やや賛成	度数	70	248	399	26	743
		9.4%	33.4%	53.7%	3.5%	100.0%
	調整済み残差	-0.7	0.7	0.7	-2.1	
どちらともいえない～反対	度数	47	213	438	50	748
		6.3%	28.5%	58.6%	6.7%	100.0%
	調整済み残差	-4.3	-2.9	4.1	3.0	
合計	度数	201	649	1054	96	2000
		10.1%	32.5%	52.7%	4.8%	100.0%

$$\chi^2(6)=62.689, p<.001$$



## (5) 伝統意識

ここまで、生死に関する考え方と出生意欲との関連を見てきた。生死に関する考え方というのは、伝統意識とも関わっていると考えられる。たとえば生死というのは神の領域であり、人間が左右すべきでないというような考え方は伝統的な考え方といえる。一方で生死を人間が決めてよいという考え方は非伝統的な考え方といえる。

そこで、本節では伝統意識（伝統や慣習に対する態度）と出生意欲との関係を検証した（表5）。伝統意識については、「以下の2つの意見に対して、あなたのお考えは、(A) (B) どちらの考えに、どの程度あてはまりますか。もっとも近いものをひとつだけお知らせください。【A】伝統や慣習は大切に守っていくべきである 【B】現代にあわない伝統や慣習は見直すべきである」という質問に対して7値の選択肢（とてもA、A、ややA、どちらともいえない、ややB、B、とてもB）の中から1つを選んでもらったものを3値にリコードして用いた（「とてもA」と「ややA」を合併し、「とてもB」と「ややB」を合併して用いた）。

表5：伝統意識と現実的な子ども数

		予定する子ども数				合計
		0人	1人	2人	3人以上	
伝統や慣習は大切に守って いくべきである	度数	36	206	391	37	670
		5.4%	30.7%	58.4%	5.5%	100.0%
	調整済み残差	-4.9	-1.2	3.6	1.1	
どちらともいえない	度数	54	123	195	16	388
		13.9%	31.7%	50.3%	4.1%	100.0%
	調整済み残差	2.8	-0.4	-1.1	-0.7	
時代にあわない伝統や慣 習は見直すべきである	度数	111	320	468	43	942
		11.8%	34.0%	49.7%	4.6%	100.0%
	調整済み残差	2.4	1.4	-2.6	-0.5	
合計	度数	201	649	1054	96	2000
		10.1%	32.5%	52.7%	4.8%	100.0%

$$\chi^2(6)=31.855, p<.001$$

結果としては、伝統意識は出生意欲と関わっていた。伝統意識が高い人（伝統や慣習は大切に守っていくべきであると考える人）は子ども数0人を予定する割合が低く、子ども数2人（戦後日本の家族イメージあるような「平均的な」子ども数）を希望する割合が高くなっていた。一方で、「どちらともいえない」と答えた人は、子ども数0人を予定する割合が高くなっていた。また、「時代にあわない伝統や慣習は見直すべきである」と答えた人は0人

の割合が高く、2人と答える割合が低くなっていた。

## (6) まとめ

ここまで、生死に対する態度と出生意欲との関係を検証してきた。安楽死や自殺といった個別の生死を判断する場面ばかりでなく、一般的な死生観においても出生意欲（予定する子ども数）との関連が見られた。生死に対して慣習に沿った態度を持つ人は、出生意欲も慣習において望ましいとされる選択をする傾向が観察された。また、出生意欲は伝統意識とも関わっており、「伝統や慣習は大切に守っていくべきである」と考える人も比較的出生意欲が高くなっていた。

## II. 非認知能力と出生意欲

### 4. 自己効力感と満足遅延耐性と出生意欲

近年、非認知能力がその後の達成との関連で注目を浴びている。ここではそのうちの2つ、自己効力感と満足遅延耐性をとりあげる。

李（2014）の整理によれば「非認知能力」とはパーソナリティなどの「認知能力」以外の能力のことを言う。後天的に獲得された資質であるスキルは「認知能力」と「非認知能力」に分けることができる。認知能力とは、「理解，判断，論理，などの知的機能（李 2014：）」を示す一方で、「非認知能力」とは「認知機能」以外の要因と定義される。どちらも労働市場における生産性（賃金等）を高める要因である。非認知能力には、パーソナリティ特性などが含まれる。本稿では、「非認知能力」の中でも生産性向上に関して注目を浴びている要因である「自己効力感」と「満足遅延耐性」に焦点をあてる。

自己効力感とは、ある行動を遂行することができるという認識、いわば自信のようなものを指すが、自己効力感がある場合には実際にその行動を遂行できる傾向があるという（Bandura 1997）。たとえば、自己効力感の概念は子どもの学校での学業的な成功などに効果を持つ（たとえば自己効力感の高い子どもは学業的な成功をおさめやすいなど）。自己効力感と起業意欲との関連を検証した研究もある（Bullough et. Al 2014 など）。自己効力感が高ければ、一見して困難そうな課題にも積極的に取り組むことができ、成功することも可能となる。逆に、自己効力感が低ければ、困難そうな課題には取り組むこともしり込みしてしまうだろうし、取り組んだとしても自信をもって行わなければ成功させるのも難しくなる。

既存の研究では、自己効力感と出生意欲との関連を検証した研究はほとんどないが、自己効力感は出産や子育てにも役立つのではないだろうか。子どもをもって、大人になるまで20年程度育てるとするのは一大プロジェクトである。いちど子どもを持ってしまうと通常は途中で投げ出すことはできない。とくに、キャリアを持ちながら複数の子どもを育てるという選択は非常に困難なものとなりうる。その困難な課題に取り組むという決断をするか

どうかは、自己効力感が関係していると考えられる。

「満足遅延耐性（自制心）」については、学業での成功や労働市場における生産性向上との関係が注目されている。満足遅延耐性が強ければ、学業等で成功する可能性が高まることが知られている（中室 2015）。スタンフォード大学内の保育園で実施された、有名なマシュマロ実験では、マシュマロを 15 分間食べるのを我慢した子どもはその後の SAT（大学進学適性検査）の点数が高くなり、社会的にも成功したというのである。つまり、幼いころから自制心を持つことが将来の成功にも役立つというのである。

自制心を持つこと（満足遅延耐性が強いこと）と出生意欲との関連を検証した研究はないが、関係がある可能性はある。なぜなら、出産と子育ては「満足遅延 (delayed gratification)」を伴う選択だからである。たとえば子どもが小さいうちは、睡眠不足を我慢して 4 時間おきの授乳をしなければならない。少し大きくなってからも、自分のための時間やお金や労力を子育てにつき込むことになる。いわば自分の時間や労力やお金を犠牲にして子育てに励むことになる（もちろん、子どもとの交流から得られる喜びという得難いメリットは子育て中にもリアルタイムで受けることはできるのであるが）。しかし、将来的にはとても大きなメリットがある。子育ての結果、将来的には子どもからの精神的・経済的な支援が受けることが期待できる。また、自分の命が尽きても次の世代につながれていくことを実感することができる。近未来の大変さに耐えて、長期的なメリットを選択するかどうかは「満足遅延耐性」が関わっている可能性があるのである。

これらのことから、本節では自己効力感や満足遅延耐性と出生意欲との関係を検証する。

## (7) 自己効力感

表 6 は、自己効力感と予定する子ども数との関連を検証したクロス表と独立性の検定の結果を示したものである。自己効力感についての設問は、「A. 人生は自分の思い通りに動かすことができる」という意見と「B. どんなにやってみても自分の人生が変えられない」という意見について、7 値の選択肢（とても A、A、やや A、どちらともいえない、やや B、B、とても B）から 1 つを選んでもらったものを 3 値にリコードしたものをを用いた（「とても A」と「やや A」とを合併し、「とても B」と「やや B」とを合併した）。

結果としては、自己効力感と出生意欲とは関連があった。「人生は自分の思い通りに動かすことができる」と考える人は予定する子ども数について、0 人や 1 人を選ぶ割合が低く、2 人や 3 人以上を選ぶ割合が高い。一方で、「どんなにやってみても自分の人生が変えられないと答えた人」（つまり自己効力感が低い人）は 0 人や 1 人を選ぶ割合が高く、2 人や 3 人以上を選ぶ割合が低くなっていた。

予想した通り、自己効力感が高い人（自分はなんとかすることができると思う人）は出生意欲が高く、自己効力感が低い人は出生意欲が低いという、予想した通りの結果となった。

表 6 : 自己効力感と予定する子ども数

		予定する子ども数				合計
		0人	1人	2人	3人以上	
人生は自分の思い通りに動か すことができる	度数	68	282	578	59	987
		6.9%	28.6%	58.6%	6.0%	100.0%
	調整済み残差	-4.6	-3.7	5.2	2.4	
どちらともいえない	度数	68	174	228	24	494
		13.8%	35.2%	46.2%	4.9%	100.0%
	調整済み残差	3.2	1.5	-3.4	0.1	
どんなにやってみても自分の 人生が変えられない	度数	65	193	248	13	519
		12.5%	37.2%	47.8%	2.5%	100.0%
	調整済み残差	2.2	2.7	-2.6	-2.8	
合計	度数	201	649	1054	96	2000
		10.1%	32.5%	52.7%	4.8%	100.0%

$\chi(6)^2=50.472, p<.001$

(8) 満足遅延耐性

表 7 : 満足遅延耐性と予定する子ども数

		予定する子ども数				合計
		0人	1人	2人	3人以上	
今 10 万円を貰う	度数	69	184	280	21	554
		12.5%	33.2%	50.5%	3.8%	100.0%
	調整済み残差	2.2	0.5	-1.2	-1.3	
どちらともいえない	度数	24	42	62	2	130
		18.5%	32.3%	47.7%	1.5%	100.0%
	調整済み残差	3.3	0.0	-1.2	-1.8	
1 年後に 11 万円を貰う	度数	108	423	712	73	1316
		8.2%	32.1%	54.1%	5.5%	100.0%
	調整済み残差	-3.8	-0.4	1.7	2.2	
合計	度数	201	649	1054	96	2000
		10.1%	32.5%	52.7%	4.8%	100.0%

$\chi(6)^2=24.116, p<.01$

表 7 は満足遅延耐性と出生意欲との関連を示した分析結果である。満足遅延耐性につい

での設問は、「お金の考え方について続けてうかがいます。お金を必ずもらえるとの前提で、(A) 今 10 万円をもらう、(B) 1 年後に 11 万円をもらう、という 2 つの選択があったとしたらあなたのお考えは、(A) (B) どちらの考えに、どの程度あてはまりますか。もっとも近いものをひとつだけお知らせください、という設問に対して 7 値の選択肢で聞いたもの（とても A、A、やや A、どちらともいえない、やや B、B、とても B）を 3 カテゴリーにリコードしたもの（「とても A」と「やや A」とを合併し、「とても B」と「やや B」とを合併したもの）を用いた。

満足遅延耐性についても出生意欲と関連があった。満足遅延耐性が低い人（つまり、今 10 万円をもらうことを選んだ人）や「どちらともいえない」という人は子ども数 0 人を選ぶ割合が多く、満足遅延耐性が高い人（つまり、1 年後に 11 万円を貰うと答えた人）は 0 人を選ぶ割合が低く、3 人以上を選ぶ割合が高い。

ただし、他の分析では独立性の検定の結果（有意確率）は 0.1%水準で有意だったのに対し、この分析では 1%水準で有意である。行パーセンテージをみても、満足遅延耐性が低い人が子どもを 2 人や 3 人以上持つ割合が低いわけではない。他の項目と比べると、関連は対称的ではなかった。

## 5. まとめ

本章の分析では、生死に関する意識や伝統意識、そして非認知能力と出生意欲との関連をみてきた。生死について人間がコントロールしてよいと考える人は、出生意欲が低い傾向にあった。それに関連して、伝統を大切にすることは出生意欲が高い傾向にあった。また、非認知能力については、自己効力感や満足遅延耐性を持つ人は出生意欲が高い傾向にあった。ただし、満足遅延耐性については、他の項目と比べると関連が直線的ではない傾向が窺えた。

ここから見えることは何なのか。出生意欲を低くする要因は必ずしも悪いものばかりではないということである。人生に対してコントロールを持つということや、時代にあわない伝統や慣習を見直そうとすることは決して否定されるべきことではない。人間が様々な枷から自由になり、自分が生きたいように生きられるようになるということは、つまり個人の尊重は、戦後の教育が目指してきたものでもある。

一方で、自己効力感の低さや満足遅延耐性の低さは、望ましくない方の出生意欲低下要因であると考えられる。たとえば、本当はたくさんの子どもの欲しいのに、育てられる自信がないから選べないというのは、本来の希望が実現できていないということになるからである。

後者の要因に関しては、今後、家庭や学校などで、子どもが自己効力感や満足遅延耐性を持つことができるような支援をしていくことで改善が可能となると考えられる。

## 文献

- 朝日新聞, 2021, 「ALS 囑託殺人事件とは 容疑の 2 医師 20 年前に会う」2021 年 5 月 12 日, <https://www.asahi.com/articles/ASP5D63BDP5DPLZB018.html>
- Bandura, Albert, 1997, *Self Efficacy: The exercise of control*, New York: W H Freeman.
- Bullough, Amanda, Maija Renko, Tamara Myatt, 2014, “Danger Zone Entrepreneurs: The Importance of Resilience and Self-Efficacy for Entrepreneurial Intentions,” *Entrepreneurship: Theory and Practice* 38(3) (2021 年 9 月 30 日取得, <https://journals.sagepub.com/doi/10.1111/etap.12006>).
- 林 直樹, 2020, 「カミュー・ブノワの批評『ガブリエル・フォーレの《レクイエムのミサ》』: 19 世紀末における死生観と楽園 (死生学の未来)」『死生学年報』: 137-155.
- 伊藤 美奈子, 2021, 「思春期における死生観と抑うつ感 (特集 自殺予防)」『指導と評価』67(9) : 24-26.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2015, 「第 15 回出生動向基本調査 結果の概要」国立社会保障・人口問題研究所ホームページ, (2021 年 9 月 30 日取得, [https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/gaiyou15html/NFS15G\\_html10.html](https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/gaiyou15html/NFS15G_html10.html)).
- 李 嬋娟, 2014, 「非認知能力が労働市場の成果に 与える影響について」『日本労働研究雑誌』(650):30-43.
- 間宮 みどり, 2021, 「一般病棟において看取りにかかわる卒後 1 年目看護師の死生観の様相」『宮崎県立看護大学研究紀要』21(1):47.
- 丁 小麗, 2020, 「中国ムスリムの死生観: 王岱與(おうたいよ)の思想から」『死生学・応用倫理研究』(25) : 172-142.
- 中室 牧子, 2015, 『「学力」の経済学』ディスカヴァー・トゥエンティワン.
- 友居 和美, 2021, 「日本の死生観に関する研究知見と課題: 世代継承性概念による考察」『社会問題研究』(70): 81-93.
- 松浦 賢長, 2020, 「わが国の大学生の人工妊娠中絶に対する態度に関する研究: 胎児観・死生観との関連」『母性衛生』41(2): 271-277.
- 「有害」規制監視隊, 2014, 「ドキュメント『完全自殺マニュアル』規制騒動」, 「有害」規制監視隊ホームページ, (2021 年 9 月 30 日取得, <http://hp1.cyberstation.ne.jp/straycat/watch/manual.htm>).